大田良策，笠原良策，笠原健蔵，黒川良安，八田道碩，藤野昇八郎）．

福田舞子氏3人（梅谷左門，村上代三郎，渡辺卯三郎）．

糸川風太氏1人（池田多仲）．

平田良行氏1人（江馬信成）．

巻頭の青木周弼宛書簡について2020年にインターネットオークションで落札した史料であるとあるのが目を惹く．古書店から購入した頓宮篤弼宛書簡，古本市目録の掲載写真による山田元珉宛書簡など，適塾記念センターにおいて精力的に資料収集が継続されていることもよく分かる．個人蔵の史料も少なからず収録されていて（例えば筆者の知人秋場仁氏所蔵の新出資料など），長年の資料発掘の成果であることが窺える．適塾門人に関する情報としては，芝哲夫「適塾門下生に関する調査報告」がしばしば引用されており，芝哲夫の貢献も少なくないことが知られる．

今更言うまでもなく，緒方洪庵は備中足守藩（現岡山市北部）の藩士佐伯家に生まれており，交流圏には全国各地の洋学者の他に，郷里備中の人々が少なくない．岡山関係人物が主に東野将伸氏によってよく紹介されている．

以上，繙閲したままに概要を記してみたが，書簡の内容について味読しうる読者が本会会員中に数多く存在するはずであるので，ぜひ多くの方々に一読をお薦めする．残る第三巻の完結を期待する会員諸氏も少なくないはずである．

（町　泉寿郎）

［大阪大学出版会，〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2-7 大阪大学ウエストフロント，TEL. 06（6877）1614，2022年3月，A5判，636頁，13,000円＋税］

町泉寿郎 著
『前近代の医家たちとその学び――日本近世医学史論考 I ――』
『幕府医学館と考証医学――日本近世医学史論考 II ――』

標記の2冊は，各冊800頁近く，計1500頁をゆうに越える大著である．頁数も多いが，内容も濃厚で，目次を写すだけでも与えられた紙面を超過するほどであり，書評を書くには難儀な大作である．

本書は書名の示す通り，著者が長年にわたり著述した医学史に関する論考を集成したものである．著者の町氏は二松学舎大学の出身．私事になるが，大学院博士課程に在籍中，評者は著者と知り合い，ともに江戸時代の医者の漢文墓碑（藤浪剛一収集資料）について読書会を始めた．著者が幕府医学館に興味を示して博士論文に取り組み，これが縁となって著者は北里研究所東洋医学総合研究所に就職することとなった．著者は6年半研究員として在籍し数多くの医史学関係論文を執筆し発表された．本書に収録された論文にはその時期のものも少なからず含まれるであろう．その後も今日に至るまで医史学関係の研究は進められ，本書の編纂へとつながったのである．

本書2冊は目次によると，各冊それぞれ総論と各論に分けられ，第1冊の総論は章と節，各論は部と章と節，第2冊の総論は節のみ，各論は章と節から成り，構成はいささか複雑である．

第1冊の「前近代の医家たちとその学び」の総論は3章から成り，第1章は「中国医学とその日本への伝播」．短文ではあるが，これだけでも中国伝統医学の特徴を知ることができる．第2章は「近世日本の医学にみる『学び』の展開」．第3章は「徳川幕府医官制度からみた近世日本の医学・本草学」．著者ならではの豊富な知識が集約されている．

各論は4部から構成される．第1部は「曲直瀬流医学と近世日本医学の形成」．著者には別に『曲直瀬道三と近世日本医療社会』（杏雨書屋・2015）

の編著があり，曲直瀬道三研究にも少なからぬ蓄積がある．第1章は「曲直瀬流医学の伝承——その成立・展開・再評価」，第2章は「曲直瀬養安院と朝鮮本医書をめぐって」，第3章は「病気治療と運気論」，第4章は「曲直瀬道三と『黄素妙論』——附．『素女妙論』『黄素妙論』対照表」，第5章は「一次資料にみる曲直瀬道三の察証辨治——附．甘静軒問・道三答『師弟問答』の翻印」．各章内の節題はここでは紙面の制約上書き出せないほど詳細である．第4章には『素女妙論（漢文）』2種・『黄素妙論（和文）』，第5章には『師弟問答』の全文が翻印されている．この2章に4種もの書籍が翻字収録されていて，これのみでも相当な価値がある．

第2部は「古方派諸家の医学とその普及」．第1章は「『儒医一本』にみる香川修庵の学問・思想」，第2章は「山脇東洋と徂徠学派」，第3章は「門人録から見る吉益流の普及」，第4章は「十八世紀瀬戸内地域の医学に関する小考」，第5章は「河内八尾田中彌性園と近世京坂の医学・儒学」．香川修庵・山脇東洋・吉益東洞はいうまでもなく日本古方派を代表する人物．第4章では中澤淳本会功労会員の先祖・尾池家，第5章では田中祐尾本会名誉会員の先祖・田中彌性園に関する歴史が記述されていて興味深い．

第3部は「漢蘭折衷のさまざまなかたち」と題し，日本近世の医学界を特徴づける漢蘭折衷の様相について，様々の角度から視点を注いでいる．すなわち第1章は「漢蘭折衷の医学」，第2章は「備前中島家二代（宗仙・友玄）の京都遊学」，第3章は「小野蘭山門人，木内政章の事蹟と学績」，第4章は「収集資料・器物からみるシーボルトと近世日本の医学」，第5章は「医家合田家の歴史と蔵書」となっている．

第4部は「医史学研究の先人たち」として斯界の先達・宇津木昆台と大塚敬節の2人に言及．第1章は「宇津木昆台と『日本医譜』」，第2章は「大塚敬節と修琴堂文庫」となっている．

第2冊の「幕府医学館と考証医学」は，著者の旧来の専攻テーマではなはだ充実している．総論は「医学館の軌跡」と題し，「前史」「歴史的概観」，そして「教育機関としての概要」について説く．付表の「医学館関係年表」は医学館の歴史を展望し，事跡を検索するのにとても便利である．

第2冊各論の第1章「医学館の学問形成」は圧巻で，230頁を費して「先行研究と基礎資料」「学校官立化をめぐって」「躋寿館創設前後の時代背景」「躋寿館官立化の意義」「昌平坂学問所と医学館」「医学館における学統の形成について」を説き，附論と資料の数々があって江戸医学館の実情を知るうえで必須の文献となっている．

第2章は「寛政の改革期の幕府医官たちの動向」．医学館を主宰した多紀家を取り巻く種々の出来事について言及する．第3章は「医学館の官立化と神農祭祀」．この神農は現在湯島聖堂斯文会の管理する神農像で，その由来が克明に分かる．第4章は「『閲微草堂筆記』を読んだ考証学者たち」．『閲微草堂筆記』は清の紀昀の筆記5種の合本で，多紀元簡・吉田篁墩・大田錦城らがこれをそれぞれの興味関心から読んだ．

第5章は「幕末考証学の位相」．ここで紹介される渋江抽斎・伊沢柏軒から森立之宛ての書簡はとても面白い．他にもっと残っていないだろうか．第6章は「小島宝素・海保漁村の天保十三年の京都訪書行」．小島宝素は1842年に江戸から京都に古典籍調査旅行を行い，各所を探訪して大きな成果を江戸の研究者たちに齎した．その探索記録は『河清寓記』として纏められ，名著『経籍訪古志』の編纂へと繋がったのである．本章ではその経緯を述べ，行草体でとても読みにくい『河清寓記』全文を翻字掲載してある．評者は従来，福井崇蘭館旧蔵古医籍の研究を手がけているが，福井はもとより伊良子・百々・三角・畑・荻野・高階などの蔵書記録はかけがえのない情報を提供してくれる．

第7章は「渋江抽斎と医学館」．「渋江抽斎の略歴」「医学館略史」「医学館別会と渋江抽斎」「新収の渋江抽斎資料からみる医学館」「新収の渋江家資料から見る渋江家の人々」「渋江抽斎と森鴎外，佐藤元萇」の6節がある．第8章は「医学館における臨床教育」．「医学館直轄化前後における臨床教育」「臨床教育の制度化」「『医学館方案』による臨床教育の実態の検証」の3節がある．第9章は

「多紀家門人録」．多紀元孝・元悳・元簡・元堅の門人録がある．第10章は「幕府医官岡田昌春とその家伝文書」．

以上，目次順に内容を示したが，本書のすべてに目を通し，熟読し，記憶に留めることは困難と言ってよいであろう．情報が膨大過ぎる．しかし，この分野の事項を調べるには恰好で有用な事典と言うにふさわしい書である．また，目次を眺め，適当に頁をめくって興の向くまま拾い読みするのもいいであろう．必ず何かしら新しく得る知識が詰まっている．実際，評者はこの書を何度開閉する動作を繰り返したかわからない．そのたびに新知識を得たものである．以上がいまだ全部熟読に及ぶことのできない評者の偽らざる感想であり，読後感は一生書けそうにもない．

本書は著者が運営協議員を務めている公益財団法人 武田科学振興財団 杏雨書屋の刊行になる非売品（限定450部）であるが，本会に所属する研究者・篤志家であれば，同財団に問合わせれば受贈は可能であろう．同財団に問合わせる際は日本医史学会会員であることを言い忘れないで欲しい．

（小曽戸　洋）

［公益財団法人 武田科学振興財団，〒541-0045 大阪府大阪市中央区道修町2丁目3-6，武田科学振興財団 杏雨書屋，2022年3月，A5判，I：770頁，II：778頁，非売品］

書籍紹介

隈部敏明（文）・梶原明彦（絵）著
『伝染病に挑んだ人々～予防接種秋月物語～』

本書は，秋月藩における天然痘に対する予防接種＝種痘活動を紹介した絵本である．江戸時代に天然痘（疱瘡）が蔓延しておりそれを恐れた民衆の様々な風習があったこと，秋月藩の八代目藩主・黒田長舒の藩政と大庄屋・天野甚左衛門の活動，そして彼らの支援を受け藩医となった緒方春朔による人痘種痘活動を描いている．形式は総ルビの絵本であり，小学生にも分かるように配慮がなされているが，特定の人物の偉人伝の域に留まらない内容になっており，大人が読むに十分に堪える作りとなっている．

ここで留意したいのが，本書の刊行が単に「絵本という形で児童・生徒や一般の人にも分かりやすく」という意図のみによるものではない点である．

本書の発行元は「予防接種は秋月藩から始まった」キャンペーン推進協議会であるが（会長：坂口良介，編集委員長：富田和英），同協議会の推進幹事団体は緒方春朔顕彰医会・天野甚左衛門顕彰会・秋月郷土館友の会であり，これら諸会は市内各所と連携し長年の顕彰活動を行ってきている．その地道な活動が同書の刊行につながったと言えよう．加えて絵本制作にあたっては，朝倉市秋月博物館・朝倉市立秋月中学校・同秋月小学校に時代考証や校正の協力を得ており，また制作資金の支援として，朝倉市や甘木ロータリークラブからの助成金に加え市民からの寄付金を得ている．

地方財政の悪化や高齢化などの地域社会の問題，学校教諭の繁忙化などにより，郷土史・地方史研究を取り巻く環境が悪化の一途を辿っており，医学史・医療史も含む日本史諸分野の考究にも徐々にその影響が出始めている．そのようななかで，このような地道な活動が長期間に渉り継続的に行われてきたことと，そして市民レベルでの協力を背景にその成果として本書が刊行されたことに，深い敬意を表したい．

（松村　紀明）

［「予防接種は秋月藩から始まった」キャンペーン推進協議会，2022年2月，B5横判，32頁，非売品］